

《2006年7月例会報告》

【日 時】2006年7月13日（木）19:15～21:15（→その後「ルン」～1:00）

【会 場】筑波大学附属高校体育館ミーティングルーム（東京都文京区大塚1-9-1）

【テーマ】それぞれのFIFAワールドカップ・ドイツ大会

【報告者】参加者

【参加者（会員）】麻生征宏（学研） 岸卓巨（中央大学） 鈴木崇正（NECメディアプロダクツ） 田中理恵（アマチュアカメラマン） 名方幸彦（文京教育トラスト） 中塚義実（筑波大学附属高校） 本田克己（(株)クラブハウス）

【参加者（未会員）】 ★江口潤（産業能率大学） ★川田勝也（(株)ランドマーク・FOOTRACK） ★中村祐馬（会社員／筑波大附卒業生） ★長田健登（会社員／筑波大附卒業生）

★は初回参加のため、参加費は免除

【報告書作成者】中塚義実他

注）参加者は所属や肩書を離れた個人の責任でこの会に参加しています。括弧内の肩書きはあくまでもコミュニケーションを促進するため便宜的に書き記したものであり、参加者の立場を規定するものではありません。

それぞれのFIFAワールドカップ・ドイツ大会

中塚義実・岸卓巨・鈴木崇正・麻生征宏他

今回は、参加者が体験した「それぞれのワールドカップ」を報告しあう形で進められた。7月10日に大会が終了してすぐの開催であったため、まだドイツに滞在中で参加できない方もいたが、ドイツでの、あるいは日本国内での、「それぞれのワールドカップ」の体験報告は、いずれも興味深いものであった。

月例会での報告や意見交換報告を踏まえながら、報告者自身が改めて書き下ろしたものを掲載することで、月例会の報告としたい。

I. 5泊6日のドイツ体験（中塚義実）

■行ってよかった！ … さまざまな人との出会い

1974年の西ドイツ大会からワールドカップを同時体験（しかもっばらテレビを通して）するようになった私にとって、32年ぶりの開催地となったドイツはどうしても行っておきたい国である。1998年フランス大会をはじめ現地で体験し、2002年は日本よりも韓国でのワールドカップに感銘し、2006年も…。ということで、担任を持つ身で、しかも学期中ではあったが、同僚の理解を得て、5泊6日のツアーに参加した。月曜日の会議に出席するため、火曜日出発の日曜日帰り。日本対ブラジルのチケット代込みで約45万円の、(株)セリエのツアーである。

飛行機は北京経由。これが意外とおもしろい。一度中国へ入国してから出国する形をとるのだが、出国審査で、係員に尋問を受けて立ち往生している日本人旅行者がいる。パスポートの写真と人相が違うというのが尋問の理由らしく、本格的な取調べを受けている。出発の時刻は迫っている。「こいつは俺の友達で、これから同じ飛行機でドイツへ行ってワールドカップを見るのだ」とフォローしたところ、

それが効いたのかどうかかわからないが通してもらえ、えらく感謝された（この彼とは帰りの飛行機でも一緒になる）。

機内では、右隣に中国在住のポーランド人技術者（英語堪能、中国語少々、筆談は無理）、左隣は中国婦人（英語だめ、中国語のみ、筆談OKだが簡略字のため不明な文字多し）。この3人で、英語と筆談を交えてのコミュニケーションを十分堪能した。いきなりおもしろい空の旅！

6月20日（火）終日移動

成田09:30→（CA422）→北京11:55（-1h）→北京14:15→（CA931）→フランクフルト18:20（-8h）

6月21日（水）AM：ケルン聖堂観光／PM～夜：「出張サロン」パブリックビューイングとビールを堪能

6月22日（木）AM：フランクフルト市内観光／PM～夜：日本vsブラジル戦観戦（於ドルトムント）

6月23日（金）AM：「出張サロン」スポーツクラブ訪問／PM～夜：パブリックビューイングとビールを堪能

6月24日（土）AM：宿泊地周辺散策／PM～移動

フランクフルト14:50→（CA966）→北京06:20→北京09:40→（CA925）→成田13:55（6月25日）

■こんなやり方があったんか！ … フランクフルトのパブリックビューイング（PV）

「フランクフルトのPVは一見の価値がありますよ」と聞いていたし、メイン川のご真ん中に設置されたPVの写真も見ていたので、楽しみにしていた。しかし話に聞くより、写真より、やはり実際に見るに限る。「ようこんなもんつくったなあ」と感心するしかない。この大会のあとに日韓の大会があったなら、頭の硬い日本人も、隅田川のご真ん中に、こういうものを設置するような話になったかもしれないなと思いつつ眺めていた。

チケットを持たなくても、開催地から遠く離れていても、テレビで楽しむことができたのが1998年までのワールドカップである。私にとっても1998年フランス大会の最高の思い出は、サンテチエンヌ市内の公園に設置された巨大スクリーンで楽しんだオランダとメキシコのゲームであった。

ところが2002年大会で、ワールドカップの放送権料は天文学的数字に跳ね上がる。そして、放送権を保護しつつ、テレビ観戦を望む多くのファンの期待に答えるために、PVは閉じた空間に限定するしかなかったのが2002年大会であり、日本は生真面目にそのことを守った。一方、韓国では、駅前や町なかの広場の巨大画面でワールドカップを放映し、多くの人々が集まって盛り上がるという様相を呈した。「そんなんありか〜」と思ったけど、2002年でははっきり言って「やったもん勝ち」になっていた。けど、ずるいしよくないことは間違いない。

今回の「ファンフェスタ」は、よく考えられた方法だと思う。FIFAから放送権を購入したLOC（組織委員会）が、ドイツ国内で「ファンフェスタ」を開催。そこではチケットを持たなくても楽しめるようになっている。その目玉がPV。フランクフルトでもうわさどおりの盛り上げりであった。特にこの日は、16:00からポルトガルvsメキシコ、そして21:00からはオランダvsアルゼンチンの好カード。盛り上がらないわけがない。

入口で荷物検査を受けて管理エリア内に入る。そこはオフィシャルスポンサーの広告や展示ブースが並んでおり、もちろん屋台もある。ビールは公式スポンサーのバドワイザーかと思いきや、ドイツビールだった。ビールに関しては譲れないというところだろうか。

管理エリア外にも屋台村は広がっている。どうやらそちらはフランクフルト市が設けた「ファンヴィレッジ」のようだ。こうすることで、誰もが楽しめる空間が生まれる。

チケットを持たないファンが、出会いや交流を楽しみ、世界最大の祭典を楽しむことができる。これがワールドカップを楽しむための仕掛けである。楽しみ方を知っている。

■テラスでのんびりアップルワイン … ザクセンハウゼン地区

6月21日と23日、いずれもフランクフルトのPVを楽しんでから、サロンの面々で、フランクフルトの古い市街地であるザクセンハウゼン地区のレストランへ行って、ビールとソーセージ、ポテトを楽し

んだ。ここでは何と言っても「アップルワイン」。ぶどうが採れなかった年にりんごで代用したのが始まりだそうだが、これがなかなかいける。うまいし、何と言っても安いのがいい。

店の前に出されたテーブルは、石畳の道路とマッチしており、いい。車も通ることはあるのだが、この道路は食事を楽しむ人や歩行者が優先である。近所の子どもがボールを蹴ったり追いかけてっこをしている姿もある。そう言えば昔、道路・路地は子どもたちの遊び場で、狭いところで三角ペスをやったり鬼ごっこをやったりして遊んだなあ、自分の幼少の頃を思い出した。笹川スポーツ財団で「道路をスポーツに開放しよう」というキャンペーンをしたことがあったが、車の通行を減らせばそれも可能。ここには自然にそういう環境があった。

夜10時頃まで日が沈まないドイツの夏。子供達も、明るい間は外に出て遊んでいる。子どものくせに夜更かしして…と思ったが、後日、ドイツ在住の方から聞いた話によると、子どももシーズンごとに遊び方が変わるらしい。夏は夜更かしもOK。外で遅くまで遊ぶ。冬はすぐに暗くなるのだから。

■どこにでもあるスポーツクラブ … ドルトムント、ボーンハイム、ラウンハイム

今回のドイツ行きの大きなねらいは、日本がお手本にしようとしているドイツのスポーツ環境を感じてくこと。そのために6月23日の「出張サロン第2弾」ではフランクフルト郊外のTurngemeinde Bornheim 1860 (TGB) というクラブを訪問した(月例会報告6月号参照)。ツルネン(体操)からはじまる健康クラブで、サッカー部門を持たないクラブであったが、実はここを訪問する途中、道に迷ったおかげで、サッカー部門を持つ近隣のクラブにたどり着くことができた。住宅街からいきなり緑の芝生があらわれたので「おっ」と思って立ち寄ったのだが、そこはサッカー(男女)とダンスの部門を持つ、SG Bornheim。人工芝のピッチだったが、通訳として同行してくれたデュイスブルク在住の瀬田氏曰く、「人工芝のグラウンドはドイツでも増えてきました」とのこと。ドイツの7部リーグに所属するクラブのようである(これも瀬田氏が掲示物を読んでくれてわかった)。朝の10:00頃だったので誰もいなかったが、この時期はサッカー部門の活動自体がお休みになるという。「6月はどのクラブも、次のシーズンに備える期間です。戦力を固めることと、スポンサーを獲得して1年間の資金の見通しを立てる期間です」と語る瀬田氏自身、単身ドイツへ乗り込み、こうしたクラブに飛び込み訪問しながら自分のプレーの場を求めている。学習院高等科時代から、筑波大学へ進学して教育実習で来校して…。結構長い期間、彼のあゆみをみてきた者として、ドイツでもまれてたくましくなった彼との再会がとてうれしい。

6月22日の日本vsブラジル戦。ドルトムントのワールドカップスタジアムに我々のバスが着いたのは15:30頃だった。ぶらぶらとスタジアムの方へ歩いていくと、手前に芝生のサッカー場と立派なクラブハウスがある。入口付近にいたドイツ人に「ゲストOK?」と聞くと「どうぞどうぞ!(ドイツ語)」と招き入れてくれる。立派なクラブハウスの中心は、吹き抜け2階建てのレストラン。ビデオを回しながら2階席の、サッカー場がみえるあたりへ向かっていき、ふと横を見ると、池田誠剛さん(横浜Fマリノス・フィジカルコーチ)がいる。「こんなところでどうしたんですか?」というのはお互い様。彼は大会期間中ドイツに滞在し、ドイツの育成環境について調べて回っているという。「やっぱり来てみてわかりましたよ」という池田さんの、大会後の総括を聞いてみたい。

それはともかく、TSC Eintracht Dortmund von 1848/95は、合気道、バドミントンからバレーボールまで、もちろんサッカー部門も含めたクラブであり、高橋日出二さん(池田さんと同行していたライブチヒ・スポーツ科学交流協会の方)によると、「ボルシアドルトムントのサポーターがつくっているクラブらしいですよ。サポーターがつくっているクラブでこれだけの規模のものは見たことがないですね」というが、確かに立派な施設と組織を持っていると感じた。創設年度が2つあるのはなぜかということレストランのお兄さんに英語で聞いてみたが、彼もよくわからなかった。たぶん、「ツルネン教室」として前身のクラブ活動が始まったのが1848年で、正式にクラブとして成立したのが1895年なのだろう。レストランのお兄さんは、「28年前からここで活動している」と言っていた。安価なレストラン(ビール大が3ユーロ、小が1.8ユーロ)だけでなく、ビジターがハンモックで休めるスペースもある。

スタジアムにやって来るファンのための「ホスピタリティ」が感じられる。

滞在していたRaunheimは、フランクフルトの市街から電車で25分ぐらいの、郊外のこじんまりとしたきれいな町。24日の午前中、この町を散策した。早朝ジョギングでは線路の手前（むしろ線路とは反対側のメイン川沿いを中心にジョギングしていた）までしか行かなかったが、線路を越えていくと、そこに、あった。「SSV RAUNHEIM 1921」という名のクラブは、陸上トラック付きのサッカー場、テニスコート、体育館、そしてレストランと、ゆったりしたスペース、緑豊かな中にある。11:00過ぎの時間帯で誰もいなかったが、車でやって来た人に、何時に開くのか聞いてみると、2時だという。常勤の職員を置かない普通のクラブは、子供達の学校が終わる午後からのオープンが普通なのだろう。

どこにでもあるスポーツクラブ。感心した。

■また来たい！ ドイツとワールドカップの旅

一度は行って見たかったドイツに、ワールドカップの期間中に滞在できて本当によかった。5泊6日（ドイツ滞在は4泊）と短期間ではあったが、日本のふがない試合ぶりを除けば、満足して帰路につくことができた。フットボールを愛する世界中の人々と同様、自分が「地球人」であることを確認できる時間・空間であった。

飛行機を使って遠くからやってくる我々だけでなく、ヨーロッパ中のあらゆる国からいろんな人がやって来ていたのが印象的だった。地理的にはヨーロッパの中心で、陸続きでもあるため貧乏旅行が十分可能であることがそうさせているのだろう。逆に、ドイツ新幹線の発達によって、アムステルダムから日帰りできるあたりが、ビジネスマンにも気軽なサッカー観戦を可能にしているのだろう（オランダ vs アルゼンチン戦の翌朝、ラウンハイム駅からフランクフルト駅までの車中で一緒になったオランダ人は、「午後からはオフィスで仕事だ」と言っていた）。チケットを持たなくても十分楽しめる、ファンフェスタの存在も大きいと思った。遊び心がいっぱい、すばらしいお祭り空間であった。

2010年は、史上初めて、アフリカの、しかも最南端で行われる。こういう機会でもない限り行くことはないだろう。この4年で自分の周囲がどう変わるかはわからないが、2010年も出かけられるように準備を進めたい。「地球人」であることを確認するために。

II. ワールドカップの楽しみ方（岸卓巨）

■ワールドカップの楽しみ方、岸卓巨編

実際にドイツに行くことを決定したのはゴールデンウィーク後。チケットも取っていない。おまけに観戦ツアーに参加するほどお金はない。しかし、そんな自分でも実際にドイツに行き、世界的な祭典に参加することができた。バックパックを背負って初めての1人旅。この場を借りて印象的な出来事を中心に振り返ってみる。

■ドイツ旅行日程

17日（土）成田 13:30 発→クアラルンプール 19:40 着 23:50 発

18日（日）フランクフルト 6:25 着 ニュルンベルクへ移動 日本対クロアチア観戦（チケットは現地購入） ニュルンベルク市内PVでブラジル対オーストラリアを観戦 ファンキャンプ泊

19日（月）adidas 本社見学・アウトレットで買い物 シュトゥットガルトでスペイン対チェルシー観戦 シュトゥットガルト駅構内泊

20日（火）1度ファンキャンプへ戻りテント撤収 ユースホステルチェックイン（マンハイム）パラグアイ対トリニダードトバゴ観戦（カイザーラウテルン） ユースホステル泊

21日（水）出張サロン in フランクフルト ユースホステル泊

22日（木）ケルン・ボン観光 ドルトムントのPVで日本対ブラジル観戦 駅車内泊

23日(金)出張サロン(クラブ訪問) 夜オランダへ向けフランクフルト出発
24日(土)アムステルダム12:00発
25日(日)クアラルンプール6:05着 11:00発→成田19:10着

■たった1日のファンキャンプ

ファンキャンプはワールドカップ期間中ドイツ国内の各地につくられ、各国からのバックパッカーを受け入れる安くて便利な施設である。そう考えて自分もシュトゥットガルトとニュルンベルクのちょうど中間くらいに位置する小さな町のファンキャンプを申し込んでいた。しかし、実際に行ってみるとそれは予想とは大きく異なるものだった。

ドイツ滞在1日目、クロアチア戦を見た後、ファンキャンプへ向かった。最寄り駅でまず感じたことは、この駅で下車する日本人の多さ。もしかして、このファンキャンプには日本人が非常に多いのではないか。海外で日本人と関わることがあまり好きではない自分にとって、それは望ましくない事態である。しかし、予想は的中した。ここに滞在している人の内訳は日本人7割、イギリスから1割、オーストラリア1割、その他1割といった感じ。今回のワールドカップには多くの日本人が訪れたようだが、このようなところでも思いがけず日本人の凄さを感じられた。また、キャンプスタッフにはほとんど英語が話せない人も多い。おまけに場所は、牧場の真ん中のようなところで、シャトルバスかタクシーで行かなければならず、このシャトルバスも本数が少なく、23時終了の試合を見に行くと、終バスを逃してしまう。結局、ドイツ滞在初日は、早めにシュラフに潜ることにした。このキャンプで夜を明かしたのは、この日が最初で最後であった。

ところで、日韓ワールドカップの時には、このようなキャンプは作られたのでしょうか。

■試合よりサポーター？

今回、幸いにも日本対クロアチア(スタジアム近くでチケット購入)、スペイン対チュニジア、パラグアイ対トリニダードトバゴの3試合を観戦することができた。当初、チケットが取れなくてもドイツへ行こうと考えていた自分にとって、実際にスタジアムでレベルの高い試合を観戦できたことは、本当にうれしかった。しかし、それ以上にうれしかったのは、世界中から来ているサポーターを生で見られたこと、交流できたことである。サポーターが盛り上がっているのはスタジアムだけではない。駅や車内にも国旗を身にまとったサポーターは多い。巨大スクリーンで試合が見られ、試合前後にはステージ上でコンサートが行われるファンフェスタも最高に楽しかった。特に印象に残っているのは、ドルトムントのファンフェスタ。日本・ブラジル戦終了後のブラジル人サポーターの盛り上がりである。ブラジル人は皆踊りだし、リオのカーニバルを想像させる。日本のグループリーグ敗退が決定した直後だったのにも関わらず、気がついたら自分もブラジル人の輪の中に入っていた。ブラジルサポーターとユニフォーム交換も行った。それにしても、ブラジル人女性の腰はどうしてあんなに早く動くのだろうか。

■お世話になったドイツ鉄道

スペイン・チュニジア戦は、ラウルが後半から登場し逆転勝ちというとてもおもしろい試合だった。試合終了後も、スペインサポーターはなかなかスタジアムを去らず、歌ったり踊ったり。そんな様子を見て、これぞワールドカップなのかななどと自分も物思いに更け、スペインサポーターと写真を撮っていたらあっという間に午前1時近くになってしまった。この日も、ファンキャンプに滞在する予定だったが、もうこの時間では最寄り駅まで行けない。仕方なく、この日は試合が行われたシュトゥットガルトの中央駅で夜を明かすことにした。駅構内には、自分と同じく、帰れなくなってしまったスペインサポーターやチュニジアサポーターが多く、日本人も何人か見られる。警察の数も多く、危険を感じずにベンチに横になってウトウトし始めたところ、どこからともなくトランペットの音が聞こ

えてきた。音の方向に足を運ぶと、駅職員の格好をした10人程がブラスバンドを形成して、駅構内を行進している。なんとも、映画の1シーンのようであった。

ドイツ鉄道には夜遅くまで走っている電車が多く、ドルトムントからフランクフルトに移動したときには、ドルトムントを深夜に出発し、フランクフルトに早朝到着することによって宿泊費を払わずに済んだ。

また、鉄道車内でさまざまな人と交流することもできた。サッカーが目的でドイツに来ている人が多いため、コミュニケーションも取りやすい。大学2年間学んだドイツ語も多少生かすことができたかな。

さらに、各駅に作られた荷物置き場も大きなザックを背負って行動していた自分にとっては非常にありがたいものだった。

以上のように、ドイツ鉄道には大変お世話になった。ありがとう、DB！！

■機内でのグループF

自分はドイツから日本に帰るときに、アムステルダム発、クアラルンプール経由、成田行きのマレーシア航空を利用した。トランジットの待ち時間も合わせて、約20時間。オランダのスキポール空港を出るときには、これからの長いフライトにうんざりしていた。しかし、離陸後しばらくして面白い事実に気がついた。自分の右側に座っている女性は、オーストラリア人。左側の男性はクロアチア人。自分は日本人。ブラジル人はいなかったが、なんとグループFではないか。2人ともサッカーが目的でオランダにいたわけではなかったが、サッカーは好きなようで、ワールドカップの結果やクロアチア語講座など話題はいろいろあり、トランジットの待ち時間も一緒にカフェで過ごした。残念ながら2人はクアラルンプール経由メルボルン行きであったため、クアラルンプール経由で別れたが、最後まで楽しむことができた。

■陸続きのヨーロッパ

ドイツ滞在中、マンハイムのユースホステルに2泊したのだが、そこで同じ部屋になった30代男性は、スイス人で、母国から北に向かう途中だと話していた。自分の町からマンハイムまで300キロ、途中でユースホステルなどに滞在しながら、目的地に向かっているのだそうだ。島国で育った自分にとっては、気軽に自転車で行けることはうらやましい。

ドイツ最終日、オランダ・スキポール空港に向かう途中に列車トラブルに合い、タクシーで次の駅まで行かなければいけなくなってしまった。しかし、最終日のためお金はほとんど残っていない。親切なタクシー運転手のおかげで、所持金全てを払うことを約束してアウトバーンを200キロ近くでとばしてもらったが、いつドイツからオランダに入ったのかは全く気がつかなかった。目的の駅に到着して周りを見回すと町のイメージが多少違うが、ドイツとオランダの国境はどこにあったのだろうか。

このように、ヨーロッパの国々が陸続きであることは教科書では分かっていたが、改めて実感させられた。

■ドイツのスポーツ関連施設

ドイツではさまざまなスポーツ関連施設を訪れることができた。サロン2002のメンバーで訪れたスポーツクラブについては、中塚氏のレポートなどを参照していただきたいが、同じようなスポーツクラブがドイツ国内には数多くあった。ユースホステルの隣の学校の校庭は、まさに「庭」にふさわしい芝生の広場と、テニスコートが4面、土のグラウンドとその周りの陸上トラックで構成されており、犬の散歩をしている人やサイクリングをしている人も自由に校庭に入ることができる。学校がわりと閉ざされた空間になっている日本の学校とは大違いだ。

ケルンでは、ケルン体育大学を見学した。大きな芝のグラウンドが何面もあり、室内トレーニング施設も充実している。勝手に学食に入り、学生料金で食事をしてきたのだが、サラダバーがあること、サイドメニューとして塩味みのパスタがあるところは学生の体を考えた体育大学ならではか。ほぼ学生全員が2リットル近いペットボトルを持ち歩いていたのも印象的だった。ちなみに、近くにあったバーの名前は「ドーピング」。

Ⅲ. 「オレンジ」がないと寂しいーオランダサポーター報告（鈴木崇正）

報告者は、90年イタリア大会以来、オランダ・サポーターを追いかけています。彼らは間違いなく平和的で、コスチュームの面白さが群を抜いているところが最大の魅力です。オレンジ色の、おそらく手作りのコスチュームに身を包んだオランダのサポーター。大声で歌っている陽気な彼らの様子を紹介しました。詳しくは、こちらをご覧ください。<http://soccerclickedit.at.webry.info/>

Ⅳ. 「はみ出しサロン」報告（麻生征宏）

■はみ出しサロン

今年の総会時に、出張サロンinドイツの話が出たところで、「日本でも何かやれないだろうか」と思ってみたのがスタート。初めは、日本とドイツで同時刻に同じゲームを見て、電話やネットなどで双方をつなぐなんていうのを考えていましたが、技術的、時間的（日本では平日の明け方）な困難さなどを考慮し、週末にパブで観戦というもっともラフなスタイルに落ち着きました。

さて、当日（6/16）は、5名（中塚、田中、中村、室田、麻生：敬称略）での開催となりました。店内は、アルゼンチンのゴールラッシュでボルテージが上がり、メッシのプレーに歓声が大きくなりました。週末ということもあり、1試合目が終わっても帰る人はまばら。オランダ対コートジボワールでも立ち見の人がけっこう出ていました。私たちも、いつのまにか、周辺にいた中国（台湾？）の人たち、イラン&ギリシャのコンビ、集まって来てしまった（本人談）大学生5人組などとも話しながら飲みながら、午前3時まで観戦を続けました。そんなこんなで、締めになぜかうどんを食べて終了。個人的には、サロンの方々と観戦できたこと、さまざまな人がどのように楽しんでいるか的一端を垣間見たことなどから、満足したイベント（飲み会）となりました。またこんなイベントをできたらと思っています。

■まだまだ特別なパブでの観戦

今回の場所の選定には、1試合だけの放送ではないこと、予約制ではないこと、できるだけさまざまな人が集まりそうなところ、などの基準を設け、HUB新宿靖国通り店に決定。しかし、意外と店の選定には難儀しました。足で探す余裕がなく、ネットでの検索をしたのですが、多くは「日本戦放映！」「2時間食べ飲み放題で〇〇〇〇円！」といった文字ばかり。こちらは「(いつでも) 放映しているところに行きたい」のであって、「特別に放映するから来てというところには行きたくない」のです。集まって見るスタイルが広まりはじめたとはいえ、このスタンスの違いはずいぶん大きかったです。

以上